# 「南京路外灘の惨状」の写真に関する考察

作者：百年非

2023 年 2 月 7 日第一版、8 月 15 日改訂版

図 1 は、楊克林・曹紅編著「中国抗日戦争図誌（中巻)」(日本語版、天地図書有限公司・新大陸出版有限公司、1994 年 11 月 10 日、ISBN 4-7601-1090-9）の 297 頁目に見られる写真である。写真の説明文は次の通りである。「南京路外灘（黄浦江沿岸通り。バンドのこと。注記筆者）の惨状。8 月 14 日午後 4 時、日本軍の砲弾が南京路外灘の華懋ホテルと江（江は汇の間違い。汇は匯の中国大陸の簡体字。華懋ホテルはキャセイホテル、匯中ホテルはパレスホテルのこと。以下同じ。注記筆者）中ホテル（現平和ホテルの南北部分）の間の大通りに落下、1694 人が死傷。そのうち外国人 15 人。」

れ、張華浜駅近くまで撤退。

南京路外灘の惨状。8月14日午後4時、日本軍の砲弾が南京路外灘の華懋ホテルと江中ホテル（現平和ホテルの南北部分）の間の大通りに落下、1694人が死傷。そのうち外国人15人。

図 1

程棟・劉樹勇・張衛編著「旧中国大博覧（下）」（科学普及出版社、1995 年 2 月、ISBN 7-110-03301-5）の 994 頁目に、「華機誤炸‘大世界’」（中国の飛行機が大世界を誤爆）との見出しの下に、図 2 の写真が掲載されている。写真の説明文は次の通りである。「8 月 14 日（1937 年 8 月 14 日。注記筆者）、……中国の飛行機が空爆を行った時、日本の軍艦の高射砲が乱射したため、爆弾の弾片が租界に落ちたものがあった。また、日本の軍艦が公共租界の外灘に停泊していたため、中国の飛行機による空爆が租界に波及した。午後 3 時頃、爆弾が南京路外灘に落下し、キャセイ及パレスの両ホテルの一部分が破壊され、中国人と外国人が百余人死傷した。」

华机误炸“大世界”

8 月 14 日，中国空军一炸弹误落大世界门前的惨景

8 月 14 日，据报道：今日上海战事，集中于空中，先是停泊于黄浦江之日舰，由出云旗舰指挥，任意轰击闸北华军阵地，继而华方空军，出现浦江上空，向日舰投弹轰炸，日舰纷放高射炮，华机毫不畏缩，盘旋于高射炮之烟幕中，奋勇轰炸。

当华机轰炸时，日舰高射炮乱放，致弹片有落于租界者。且日舰

停于公共租界外滩，华机轰炸，致波及租界。下午 3 时许，弹落南京路外滩，华懋及汇中两饭店一部份被毁，死伤中外市民百余人。4 时许，有一华机因受日高射炮微伤，飞离上海时，因不能控制，至大世界附近落下两弹，当即爆炸，死伤枕藉，惨不忍睹，计炸死 800 余人，伤者 600 余人。

図 2

一方、この本の995頁目に「日機轟炸上海、平民死傷無数」（日本の飛行機が上海を空爆。無数の市民が死傷）との見出しの下に、図1と全く同一の図3の写真が掲載されて、その説明文は、「南京路外灘一帯被炸」（南京路外灘一帯が爆撃された）となっている。明らかに、この本の編集者が、「南京路外灘一帯が爆撃された」のは「日本の飛行機の爆撃」によるものと決め付けているのである。

日机轰炸上海，平民死伤无数

南京路外滩一带被炸

据报纸报道，8月23日午后1时，在上海公共租界，江西路附近，“有一炸弹自天空落在美国海军堆栈屋上，直穿三层楼至底层”，“又有一弹落在南京路，直坠先施公司三层阳台上，当即爆发，永安与先施两公司及邻近各商店大受损伤，管理红绿灯及指挥交通之巡捕及两公司顾客，与来往之中外人士，被炸死伤者达七百以上”。

28日下午2时许，在上海南站，“敌机十二架，在南站附近共投炸弹八枚，该站站台、天桥及水塔、车房被炸毁，同时在站台候车离沪难民均罹于难，死伤达六七百人。死者倒卧一地，伤者转侧呼号，残肢头颅，触目皆是，血流成渠，泥土尽赤，景象之惨，无以复加。”

“二十八日南站的大轰炸，难民死七百人，伤不计其数。三十一日，在杨行汽车站候车离沪的难民伤兵二百余人，全数炸死。”

上海先施公司被炸惨景

図3

呉広義「侵華日軍南京大屠殺日誌」（中国侵略日本軍南京大虐殺日誌）（社会科学文献出版社、2005年9月、ISBN 7-80190-699-3）の9頁目に図4の写真及び説明文が掲載されている。「8月14日（1937年8月14日。注記筆者）、日本の飛行機が上海随一の繁華街南京路と黄浦灘（黄浦江沿岸通り。外灘とも呼ばれる。バンドのこと。注記筆者）

を爆撃、市民 1594 人が死傷した。」

侵华日军在上海战场的大屠杀是以“无差别级轰炸”为开端的。侵华日军派出飞机，在进攻军事目标的同时，对上海市区也进行狂轰滥炸，而且用机关枪向密集的人群扫射。8月14日，日机轰炸上海最繁华的南京路和黄浦滩，市民死伤1594人（见图6）；同日，日机轰炸爱多亚路和虞洽卿路，炸死市民1011人，炸伤1008人。①

图6　遭日机轰炸的上海南京路上的惨况

図 4

彭玉龍「謝罪与翻案——德国和日本对第二次世界大戦侵略罪行反省的差異及其根源」(「謝罪と歴史否認——ドイツとの日本が第二次世界大戦の侵略罪に対する反省の違い及びその根源」。解放軍出版社、2001 年 1 月、ISBN 7-5065-3989-6）の 44 頁目に、次の記述が見られる。「1937 年 8 月 14 日、日本の飛行機が上海を爆撃。爆弾が南京路外灘に落下。キャセイホテルが破壊され、南京路は死体が乱れ散らかっていた。」図 5 参照。

谢罪与翻案

攻上海，同时出动100余架飞机反复进行毁灭性轰炸。

1937年8月14日，日机轰炸上海。炸弹落于南京路外滩。华懋饭店被毁，南京路一片尸骸狼藉。在炸毁的建筑物残迹中，受伤者被压在下面，呻吟惨号；炸死者血肉模糊，肢体残缺。几分钟后，虞卿路与爱多亚路交叉点也遭轰炸，该区是上海闹市之一，有不少难民聚集在道路两旁，炸弹落在这里，附近的房屋大都被炸毁或震塌，停在路边的多辆汽车全部起火燃烧，电缆被炸断垂落地面又引起大火，使灾情倍加惨烈。这次轰炸，共炸死无辜平民1742人，伤1873人，炸毁与烧毁房屋难以计算财产价值。

図 5

湖南省長沙市抗戦文化研究会主催の「抗日戦争紀念網」が 2017 年 12 月 12 日、「南京大屠殺歴史照片中的見証之日本轟炸上海市南京路」（南京大虐殺歴史写真の中で証明された上海市南京路への日本の爆撃）という文章を発表し、使われた写真の説明文は、「1937 年 8 月 14 日、日本軍が上海市南京路を爆撃。1694 人死傷。」となっている。図 6 参照（https://www.krzzjn.com/show-404-63314.html）。

図 6

1937 年 8 月 14 日午後、上海南京路外灘（バンド）のキャセイホテル及びパレスホテルが爆撃されたのは（以下「8・14 爆撃」）、果たして日本軍の砲弾（「中国抗日戦争図誌（中巻）」）、日本の飛行機の爆撃（「旧中国大博覧（下）」）、日本の爆撃（「抗日戦争紀念網」）によるものだったのだろうか？本文では、中国側の一次史料などを用いて、図 1「南京路外灘の惨状」の写真について考察し、「中国抗日戦争図誌（中巻）」などが編み出した虚偽を暴き、歴史の真相を究明することを目指す。

## 考察一　英字新聞 North-China Daily News の報道

「8・14 爆撃」の翌日、当時上海の英字新聞 North-China Daily News（漢字表記「字林西報」）は、1937 年 8 月 15 日、一面トップに「600 Persons Killed in Air Raids on Shanghai」（上海空襲で 600 人死亡）と題する記事が四枚の写真付きで掲載された。その中の一枚は図 1 の写真と全く同じである。図 7 の赤枠の写真を参照のこと。

North-China Daily News の記事は次のように述べている。「CHINESE BOMBS DROPPED IN FOREIGN AREAS.…the day's great tragedy occurred about 4.30, when two bombs were dropped in the Settlement and two in the French Concession and approximately 600 persons, mostly Chinese, were killed and 1000 wounded. Two bombs fell in Nanking Road on the Palace hotel and the Cathay Hotel….Two more were dropped on the Great World.」（外国人居住地に中国の爆弾が落下。……その日の大きな悲劇は午後 4 時半頃に起こった。共同租界に 2 発、フランス租界に 2 発の爆弾が投下され、約 600 人（主に中国人）が死亡し、1000 人が負傷した。2 発の爆弾は南京路にあるパレスホテルとキャセイホテルに落ちた。……更に 2 発が大世界に落ちた。）図 7 の写真に対する North-China Daily News の説明文は「Scenes in Nanking Road between the Palace Hotel and the Cathay Hotel when bombs from Chinese aero-planes yesterday afternoon dropped on the two buildings and more than 100 persons were killed in the roadway and many more injured.」（昨日午後、中国の飛行機からの爆弾が、パレスホテルとキャセイホテルに落下したため、100 人以上が道路上で死亡し、大勢の人が負傷した南京路の光景。）となっている。

NORTH-CHINA DAILY NEWS

SHANGHAI, SUNDAY, AUGUST 15, 1937

600 Persons Killed in Air Raids on Shanghai

CHINESE BOMBS DROPPED IN FOREIGN AREAS

Nanking Road Corner and Great World Turned Into Shambles by Missiles of Death

HUNDREDS ARE RUSHED TO HOSPITALS

Foreign Hotels and Chinese Amusement Resort Hit When Attack on Japanese Flagship Fails

Britain Makes Demarches For Local Fighting

Representations Against City as War Zone

BOTH SIDES NOTIFIED

London Press Condemns Japanese Action

WHEN AEROPLANE BOMBS FELL ON NANKING ROAD

LITTLE CHANCE IN POSITION OF TROOPS IN LINE

88th Division Repulsed in Small Attack

UNIVERSITY DOOMED

Chinese Protest Against Use of Settlement

Japanese Navy Asked to Move Their Flagship

Council Seeking to Have It Removed Elsewhere

BRITISH DEMARCHE TO FIGHTING PARTIES

SHANGHAI'S MOURNING

Popular Local American Shot Through Heart

The Rev. Frank Rawlinson Victim of Bombardment

TRAGEDY NEAR NANKING THEATRE

Welch Fusiliers Leave for Shanghai

FOREIGNERS WARNED TO TAKE SHELTER

Many Consulates Issue Advice to Nationals

図 7

North-China Daily News は明確に「中国の飛行機からの爆弾が、パレスホテルとキャセイホテルに落下したため、100 人以上が道路上で死亡し大勢の人が負傷した」と明言している如く、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党の空軍であることが明らかである。

考察二　台湾国史館公文書に見られる兪鴻鈞の電報

当時上海市市長の兪鴻鈞が 1937 年 8 月 14 日付け、国民政府軍政部部長の何應欽宛ての電報の中で次のように述べている。「本午後 4 時半、我が方の飛行機が応戦のために飛来し、日本の飛行機と交戦している際、突然二発の爆弾がフランス租界の大世界附近に落下し、通行人二百余名が死傷した。フランス総領事の抗議の書簡が今晩届いた。同時に、公共租界外灘のキャセイホテルもまた同様の事件が発生し、当該ビルの一部分が爆破され、数十人が死傷した。今のところ、英領事の発言はない。」図 8 参照（https://ahonline.drnh.gov.tw/index.php?act=Display/image/2670553=IIspAK#d8l）。

0786

國民政府軍事委員會辦公廳機要室

26年8月14日　來電紙

自上海發　號次 10321

特急南京軍事委員會何部長○密今日
下午四時半當我方飛機來滬應戰與
日機交戰時忽有炸彈二枚落於法租
界大世界附近傷斃路人二百餘名法
總領事今晚已來函抗議同時公共租
界外灘華懋飯店亦發生同樣事件炸
毀該大廈一部份並傷斃數十人但截
至現在英領尚無表示又今日下午美
領由電話抗議我飛機在美旗艦旁投
彈當經理駁後謹電奉聞上海市市長
俞鴻鈞叩寒戌印

審查員簽名　譯電員簽名

26009959



図 8

この電報の文面から、国民党空軍飛行機の「二発の爆弾がフランス租界の大世界附近に落下し」、且つ「公共租界外灘キャセイホテルもまた同様の事件が発生した」ため、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党空軍であることが明らかである。

考察三　台湾国史館公文書に見られる張治中の電報

当時京滬警備司令の張治中が 1937 年 8 月 15 日付け蔣介石宛ての電報の中で次のように述べている。「空で敵の飛行機と戦っていた際、我が飛行機が数発の爆弾を大世界に落とした。このため、我が国民が四百余人、外国人が七、八人死傷した。」図 9 参照（https://ahonline.drnh.gov.tw/index.php?act=Display/image/26706415=SAJxH#f5J）。

國防部民國105年11月10日
國辦文檔字第1050005267號函註銷密等

國民政府軍事委員會辦公廳機要室

1107

來電紙

審查員簽名　譯電員簽名

図 9

North-China Daily News の記事と兪鴻鈞の電報から、1937 年 8 月 14 日国民党空軍の飛行機が二か所（①キャセイホテルとパレスホテル、②大世界）を誤爆したことが分かる。張治中は電報の中で爆弾がキャ

セイホテルに落下したことに触れていないものの、「我が飛行機が数発の爆弾を大世界に落とした」と認めているので、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党空軍であることが明らかである。

考察四　駐中華民国米国大使ネルソン・トラスラー・ジョンソンの電報

台湾国史館所蔵の中華民国外交部公文書の中に、当時駐中華民国米国大使ネルソン・トラスラー・ジョンソン（Nelson Trusler Johnson）の電報が残っている。ジョンソン大使が 1937 年 8 月 14 日付け電報の中で次のように述べている。「They are dropping bombs, two of which have landed near the Race Course and others have hit the Palace Hotel and the Cathay Hotel.」（彼らは爆弾を落としている。2 発は競馬場の近くに落ち、ほかはパレスホテルとキャセイホテルに命中した。）図 10 参照（https://ahonline.drnh.gov.tw/index.php?act=Display/image/2670780i3EAldT#RbQ2）。

Delivered by American Ambassador in person on August 14th 1937 at 11.00 p.m.

1483

Chinese airplanes have been bombing Shanghai constantly to-day. They are violating the areas of foreign refuge ~~and are~~ by flying over it. They are ~~fast~~ dropping bombs, two of which have landed near the Race Course and others have hit the Palace Hotel and the Cathay Hotel. There are hundreds killed and wounded. Two bombs have dropped near the flag-ship "Augusta" which is coming into port. There is no question as to the identity of those planes: they are Chinese military planes.

This is wanton slaughter. I urge you most strongly to make emphatic representations to the Nanking Government to stop this violation of the neutral area and this wanton slaughter.

図 10

ジョンソン大使の電報の内容から分かるように、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党の空軍であることが明らかである。

考察五　中華民国外交部公文書の記述

台湾国史館所蔵の中華民国外交部「我機轟炸波及非敵」(我が飛行機の爆撃が敵以外の人を巻き込む) と題するファイルの中に次の電報の記録が残っている。「Bombs allegedly dropped from our airplanes according to French Consul Bandez and British Commander defense forces（forces は原文「droces」となっている。訂正筆者）Telfer-smollett will make world opinion lose sympathy in our cause. …It is a fact that our planes dropped bombs greatly off the mark….」(バンデス仏領事とテルファー・スモレット英国防軍司令官によれば、わが飛行機から投下されたとされる爆弾は、世界の世論にわが大義への同情を失わせるだろう。…我が飛行機が投下した爆弾が目標から大幅に外れたことは事実である…。) 図 11 参照 (https://ahonline.drnh.gov.tw/index.php?act=Display/image/2670780i3EAldT#NYz2)。

14182
外交部電報科　來電
來電第 90356 號

來自何人 Yui Ming　發電 26年 8月 14日 21時 50分
來自何處 Shanghai　收電 26年 8月 14日 22時 40分

T.T.Li Nanking

Bombs allegedly dropped from our airplanes according to French Consul Bandez and British Commander defense droces Telfer-smollett will make world opinion lose sympathy in our cause. Efforts were made by them to get Japanese to agree not to anchor war-ship off war-ship along Yangtsepoo but Japs refuse. Our defense is that Japs war-ships are being sheltered in International Settlement. When airplanes fight in air above Shanghai on very windy day accidents will happen. It is a fact that our planes dropped bombs greatly off the mark but they were being shot at by Japanese anti-aircraft guns and attacked by enemy planes efforts to neutralize settlement impossible as long as Jap warships and troops being sheltered there. British Commander says try enter settlement they will oppose by but not open fire. They think they can disarm detach seeking refuge in settlement.

Yui Ming



図 11

North-China Daily News の記事と兪鴻鈞の電報から、1937 年 8 月 14 日国民党空軍の飛行機が二か所(①キャセイホテルとパレスホテル、②大世界)を誤爆したことが分かる。この電報は、爆弾がキャセイホテルに落下したことに触れていないものの、「我が飛行機が投下した爆弾が目標から大幅に外れたことは事実である」との文言は、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党空軍であることを裏付けている。

考察六　『困勉記』の記述

台湾国史館所蔵の「蔣中正総統文物」の中に、王宇高・王宇正著『困勉記』の手稿が見られる。その第 44 巻の中に次のような記述が見られる。「(1937 年 8 月) 14 日、聞くところによると、我が空軍が続けて出撃し、上海の敵陣及び公大紡織工場を爆撃し、良い成果を上げたものの、崇明の敵艦への爆撃は命中せず、且つ 2 機の飛行機の爆弾鉤が敵に撃たれて破損し、2 発の爆弾が英仏租界に各 1 発落ちたため、各国の非難が殺到し、上海戦に干渉する動きが出ている。(蔣介石) 曰く：聖なる神よ、上海戦が早く勝利するよう、我が中華を佑け給え。」図 12 参照 (https://ahonline.drnh.gov.tw/index.php?act=Display/image/2683522r57Tjyx#cbL)。
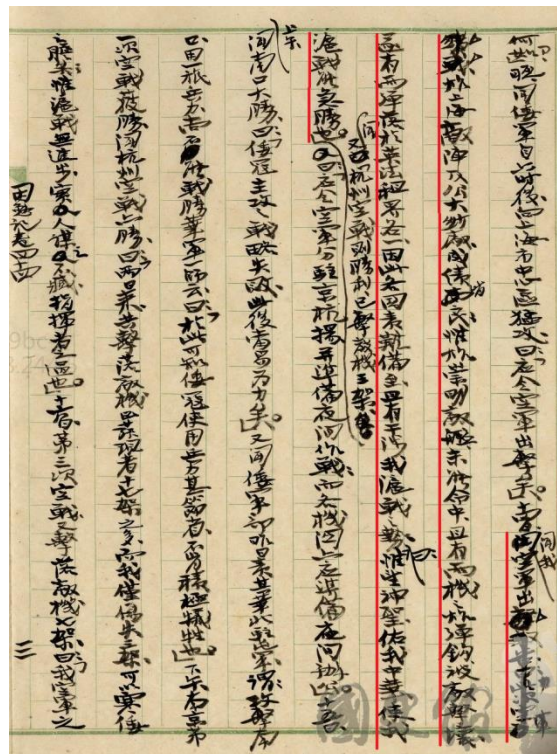
図 12

国史館館長の呂芳上が『困勉記』のために書いた前書きによると、『困勉記』は蔣介石が「奉化の同郷である王宇高（墉伯）、王宇正（垣叔）に命じて、引き続き‘九記’の形で（蒋介石の）日記の内容を収録させたもの。概ね五類に分け、‘五記’（困勉記、游記、学記、省克記、愛記。注記筆者）と名付けるべき。……『困勉記』(1902-1943)は、蔣が国民党と政府の公務を処理する心の動きを書き記したものである。」このため、『困勉記』の上記記述は非常に貴重である。文中の「2 発の爆弾」の書き方は正確ではないにしても、『困勉記』の記述は 1937 年 8 月 14 日、国民党空軍の飛行機により投下された炸弾が「英仏租界」、即ち North-China Daily News の記事と兪鴻鈞の電報に言及されているキャセイホテルとパレスホテル、大世界に着弾したことを裏付けている。故に、『困勉記』の記述から、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく国民党空軍であり、しかも蔣介石がこの事件を知っていたことが分かるのである。蔣介石がこの事件を調査するようとの命令を出したので、南京の軍事當局が 8 月 15 日、誤爆に対して「非常に遺憾である」旨声明を発表したものと思われる。考察七、考察八を参照のこと。

考察七　The North-China Herald の報導

１．当時上海で発行されていた英字週刊新聞 The North-China Herald（漢字表記「字林星期週刊」）は 1937 年 8 月 18 日号の 273 頁目にロイターの下記ニュースを転載した。

Chinese Investigating

Nanking, Aug. 14.

A thorough investigation into the circumstances leading to the bombing of the International Settlement was opened here this evening by the Chinese authorities.

According to the report of the Squadron-commander, when six Chinese bombers attempted to attack the Japanese cruiser, Idzumo, this afternoon they met with a hail of shells from anti-aircraft guns.

It was subsequently found that one Chinese machine was missing and two bombers were damaged. The bombers, with their pilots wounded, barely managed to landed in Chapei.

The bombs, the report stated, were dropped on the Settlement accidentally

when the bomb-racks were damaged by Japanese anti-aircraft guns.

Though official reports submitted at the enquiry appear to exonerate the Chinese pilots, General Chiang Kai-shek has ordered a thorough investigation and will punish the pilots involved if it is found that the bombing of Settlement was due to careless marksmanship. （中国当局は本日夕刻、国際租界への爆撃事件の経緯について徹底的な調査を開始した。中国の飛行隊指揮官の報告によると、本日午後、中国軍の爆撃機 6 機が日本の巡洋艦「出雲」を攻撃しようと試みたが、対空砲火の雨に見舞われた。その後、中国機 1 機が行方不明となり、2 機の爆撃機が損傷したことが判明した。パイロットが負傷した爆撃機は辛うじて閘北に着陸することができた。報告によると、日本の対空砲火によって爆撃機の爆弾ラックが損傷された際、爆弾が誤って租界に落下したとされている。公式な報告は中国のパイロットたちを無罪とする傾向が見受けられるが、蒋介石将軍は徹底的な調査を命じ、もし租界への爆撃が不注意な射撃によるものであった場合、関与したパイロットたちに対して懲罰を科すこととなるだろう。）図 13 参照。

**Chinese Investigating**

Nanking, Aug. 14.

A thorough investigation into the circumstances leading to the bombing of the International Settlement was opened here this evening by the Chinese authorities.

According to the report of the Squadron-Commander, when six Chinese bombers attempted to attack the Japanese cruiser, Idzumo, this afternoon they met with a hail of shells from anti-aircraft guns.

It was subsequently found that one Chinese machine was missing and two bombers were damaged. The bombers, with their pilots wounded, barely managed to land in Chapel.

The bombs, the report stated, were dropped on the Settlement accidentally when the bomb-racks were damaged by Japanese anti-aircraft guns.

Though official reports submitted at the enquiry appear to exonerate the Chinese pilots, General Chiang Kai-shek has ordered a thorough investigation and will punish the pilots involved if it is found that the bombing of the Settlement was due to careless marksmanship.

図 13

２．また、The North-China Herald は 1937 年 8 月 25 日号の 294 頁目にロイターの下記ニュースを転載した。

「Madame Chiang Kai-shek has replied to the telegram of Mrs. Theodore Roosevelt Jr., in which the daughter-in-law of the former President of the United States beseeched peace for the foreign concessions, as follows:

"No one deplores more than we do the terrible and tragic accidental dropping of bombs from two damaged aero-planes.

"The Generalissimo was shocked and grieved at the news and ordered an investigation, since he had specifically ordered that no bombs be dropped south of Soochow Creek."」（蒋介石夫人は、セオドア・ルーズベルト・ジュニア夫人[注 1]が外国租界のために平和を強く求めた電報に対して、次のように返答した。「このたび、2 機の飛行機による爆弾投下という悲劇的な事故を、我々ほど嘆き悲しむものはいない。この知らせにショックを受けた委員長は、かつて蘇州河の南側には爆弾を投下しないよう特別に命令していたので、調査するよう命じた。」図 14 参照。

**Mme. Chiang Kai-shek Replies to Mrs. T. Rosevelt**

Nanking, Aug. 15.

Madame Chiang Kai-shek has replied to the telegram of Mrs. Theodore Roosevelt, Jr., in which the daughter-in-law of the former President of the United States beseeched peace for the foreign concessions, as follows:

"No one deplores more than we do the terrible and tragic accidental dropping of bombs from two damaged aeroplanes.

"The Generalissimo was shocked and grieved at the news and ordered an investigation, since he had specifically ordered that no bombs be dropped south of Soochow Creek.

"It is reported that anti-aircraft guns wounded both pilots and damaged the bomb racks, causing the bombs to be loosened.

図 14

蒋介石夫人宋美齢の返電の内容から分かるように、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党の空軍であることが明らかである。

## 考察八　『中国全面抗戦大事記』の記述

華美出版公司編『中国全面抗戦大事記』第一輯（華美出版公司、1938年7月15日発行）の21頁目に次の記述が見られる。「(1937年) 8月14日：……中国飛行機の爆撃が租界を巻き込んだ。午後3時過ぎ、爆弾が南京路外灘に落下し、キャセイ及びパレス両ホテルの一部分が爆破され、中国人市民と外国人が100余人死傷した。外国人の死者は殆どこの両ホテルの宿泊客である。4時過ぎ、一機の中国の飛行機が日本の高射炮の砲弾により軽い損傷を受け、上海から離れる際、制御不能になり、爆弾が大世界附近に落下爆発したため、多くの死傷者を出した。現場の惨状は見るに堪えない。合計800余人が爆死し、600余人が負傷した。」図15参照。

如此英勇善戰，更使人興奮，故當轟炸時，市民赴外灘及各大廈屋頂觀戰者，頗爲熱烈衆多。
◇當華機轟炸時，日艦高射砲亂放，致彈片有落於租界者。且日艦停於公共租界外灘，華機轟炸，致波及租界，下午三時許，彈落南京路外灘，華懋及匯中兩飯店一部份被毁，死傷中外市民百餘人，而外人之死難者，大都係該兩飯店之旅客。四時許有一華機因受日高射砲彈微傷，飛離上海時，因不能控制，致大世界附近落下兩彈，當即爆炸，死傷枕藉，慘不忍覩，計炸死八百餘人，傷者六百餘人。
◇張治中將軍，今日接見記者，發表談話。
◇上海市長俞鴻鈞對於日軍之利用租界爲攻擊華軍之根據地，正式向各國駐滬領袖領事提出抗議。
◇蔣委員長接見孫殿英，聽取北平附近之戰況。
◇南口要塞，仍在華軍手中，日以大批戰車前驅進犯，但均被華軍擊退。良鄉有被華軍收復說。
◇美國務卿赫爾，以上海空戰，波及租界後稱：「政府業已訓令駐中國大使與各地領事，着其堅勸本國僑民，接受政府保護，俾得遷離危險地帶。並稱已向中日兩國政府，提出交涉，請其勿使上海方面十萬名左右之外僑遭受危險。
◇中國外交部發表聲明，評述日本侵華之歷史，宣稱：日本破壞中國領土主權之完整，違反國際聯盟會章九國公約及凱洛格非戰公約；並謂：中國爲自衛及維持條約之尊嚴而戰；末謂：對中國有同情之世界各國須認淸對於國際條約應盡之義務。
中國全面抗戰大事記　八月份　二一

図15

また、この本の26頁目に次の記述が見られる。「(1937年) 8月15日：……南京の軍事当局は声明を発表し、中国の飛行機が制御不能な状況下で誤って租界区域内に落とした爆弾及び発生した損害につい

て、非常に遺憾であると表明し、当時中国の飛行機が日本の高射砲に撃たれて損傷を受け、爆弾嚢は不幸にも損傷を受けたため、爆弾が外れて制御不能に陥ったと説明した。」図 16 参照。

中國全面抗戰大事記　八月份　二六

不放棄領土之任何部分，遇有侵略，惟有實行天賦之自衛權以應之。日本苟非對於中國懷有野心，實行領土之侵略，則當對於兩國國交謀合理之解決，同時制止其在華一切武力侵略之行動，如是，則中國仍當本其和平素志，以期挽救東亞與世界之危局。要之：吾人此次非僅爲中國，實爲世界而奮鬥，非僅爲領土與主權，實爲公法與正義而奮鬥！吾人深信，凡我友邦，既與吾人以同情，又必能在其鄭重簽訂之國際條約下，各盡其所負之義務也。

八月十五日

◇閘北與江灣繼續發生戰事，仝日未停。據華方情報：華軍前線均有進展。

◇上海市長俞鴻鈞駁覆領袖領事因中國飛機肇禍之抗議，並對於租界當局容忍日軍以租界爲作戰根據地及在租界中央區域日本各銀行及其他房屋裝置高射炮之行爲，加以質問。

◇張治中將軍今日發表通電。蔡廷鍇將軍赴嘉興晤張發奎將軍，有所商談。

◇上海英國當局決定最短時間內將英僑婦孺撤退至香港。上海兩租界今晚起施行戒嚴，晚十時後至翌晨六時止，禁止任何行人車輛通過。法租界並頒戒嚴辦法六條。

◇南京軍事當局發表聲明，對於中國飛機在不能控制之情狀下所誤落於租界區域內之炸彈，及其所發生之損害，表示十分遺憾，並加以解釋，幷稱：當時有中國飛機被日本高射砲所傷，炸彈囊亦不幸損壞，致炸彈脫穎而出，無法控制。

図 16

『中国全面抗戦大事記』は、「8・14 爆撃」の経緯だけでなく、南京の軍事当局が「8・14 爆撃」に対して「非常に遺憾である」という声明を出したことについても言及している。南京の軍事当局のこの声明は「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党空軍であるという動かぬ証拠となっている。

考察九　『上海時代（下）』の記述

当時日本同盟通信社上海支局長の松本重治が『上海時代（下）』(中央公論社、2015 年 6 月 25 日改版発行、ISBN 978-4-12-206133-0）の 321 頁目と 322 頁目に「8・14 爆撃」の様子を次のように生々しく書き記している。「十四日午後四時少し過ぎ、私が「同盟」支社にいる

と、中国空軍の編隊が上手から黄浦江上空に進んで来て、旗艦「出雲」の高射砲や機関銃が反撃しているようだと、記者の一人が急いで駈けよって、知らせてくれた。すぐ窓側に行き、黄浦江の上空を眺めると、マルチン爆撃機の五機編隊で、「出雲」めがけて進んでいるではないか。私の肉眼では、編隊の高度はだいたい七、八百メートルとみた。「出雲」その他の高射砲が、パーン、パパーンと鳴り響いている。ふと見ると、五機のうち一機の急所に高射砲の弾が命中したらしい。……すると、編隊は「出雲」の方向からやや左旋回し始めたと思うと、一つ、二つ、三つと大型の爆弾を落としつつ、租界上空を通って飛び去った。爆弾が落ちていくのが手にとるように判ったが、爆弾が、惰性のためか、飛行機の進む方向に、一つは愛多亜路の上空に達し、「同盟」支社のあるビルの頭をかすめて、約三百メートルほど先の愛多亜路の十字街の舗装道路上で炸裂した。その十字街の一角には、大衆歓楽センターである「大世界」という四、五階のビルがあり、十字街上と「大世界」内にいた千人余りが、爆風と破片とで死亡した。あとで聞くと、爆弾は二百五十キロのものであった。第二弾は南京路のカセイ・ホテルの玄関先で炸裂し、数百枚の窓ガラスが破壊された。そのため、通行中の中国人約二百名、外人八名が死んだ。……第三弾は南京路を隔ててカセイ・ホテルの向い側のパレス・ホテルの屋根を貫いて地階に達し、数十人の死者を出した。」

松本重治『上海時代（下）』の記述内容から分かるように、「8・14爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党空軍であることが明らかである。

考察十　『MY TWENTY-FIVE YEARS IN CHINA』の記述

当時上海の英字新聞 The China Weekly Review（漢字表記「密勒氏評論報」）の主筆兼発行者のジョン・B・パウエル（John B. Powell）の回想録『MY TWENTY-FIVE YEARS IN CHINA』（The Macmillan Company、1945）の 302 頁目に次の記述が見られる。

「The other tragic happening of Black Saturday occurred within a few minutes of the first bombing. These bombs, five in number, were also aimed by Chinese aviators, flying Northrop bombers, at the Japanese battleship Idzumo in the harbor, but missed their mark by about five hundred yards and crashed into the busiest block of Nanking Road, Shanghai's main street, and directly in front

of the city's two leading hotels, the Palace and the Cathay.」図 17 参照。(暗黒の土曜日のもうひとつの悲劇的出来事は、最初の爆撃から二、三分も経たないうちに起こった。これらの爆弾も、数にすると五発だが、シナ人の飛行士がノースロップ爆撃機を操縦して、湾に停泊中の日本の戦艦「出雲」を狙ったものだった。しかし、四六〇メートルほど的をはずし、南京路の一番賑やかなブロックに激しい音を立てて着弾した。南京路は上海のメインストリートであり、上海で二本の指に入るホテル、パレス・ホテルとキャセイ・ホテルの前を通っていた。和訳の引用元:「在支二十五年(下)」128 頁目、中山理訳、祥伝社、2008 年 4 月 1 日、ISBN 978-4-396-65042-1)

302 MY TWENTY-FIVE YEARS IN CHINA

sitting and which had thus escaped incineration, established his identity as a well known American businessman in Shanghai. The other figures in the car were his wife and the Chinese chauffeur.

After the police and Red Cross workers had finally removed the last truckload of bodies from the scene, they sent back another truck which they loaded with legs and feet which the explosion had severed from the bodies of the victims and scattered over the plaza in grotesque array. Among those killed at this street intersection were ninety Chinese printers out of a staff of one hundred employed by the Seventh Day Adventist mission in the production of their church magazine. The office of the magazine had previously been located in Chinese territory, but it had been moved into the Settlement for safety on the day preceding the bombing.

The other tragic happening of Black Saturday occurred within a few minutes of the first bombing. These bombs, five in number, were also aimed by Chinese aviators, flying Northrop bombers, at the Japanese battleship *Idzumo* in the harbor, but missed their mark by about five hundred yards and crashed into the busiest block of Nanking Road, Shanghai's main street, and directly in front of the city's two leading hotels, the Palace and the Cathay. This street was also crowded with Chinese refugees, several hundred being killed and wounded. Several foreigners were killed and others wounded at this point.

図 17

ジョン・B・パウエル『MY TWENTY-FIVE YEARS IN CHINA』の記述内容から分かるように、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党空軍であることが明らかである。

考察十一 『抗戦半月刊』の記述

抗戦出版社編『抗戦半月刊』第一、二号合併号(北新書局、1937 年 10 月 16 日発行)の 93 頁目に「淞滬抗戦一月記」(淞滬抗戦一ヶ月

記）があり、次の記述が見られる。「(8 月 14 日)、……午後 4 時 45 分、我が飛行機 2 機は機体尾部が撃たれて損傷し、爆弾ラックが損傷したため、2 発の爆弾が誤って大世界の前に落下し、400 余人が死傷した。」図 18 参照。

淞滬抗戰一月記　佚名

（八月十三日）日軍藉口虹橋事件，發於晨三時，向我閘北橫浜橋以東及寶興橋一帶守軍開槍挑釁，我守軍並未予以還擊，直至上午九時十五分，虹口日軍開始進攻，從此正式揭開了淞滬抗戰的序幕。下午四時二次向我八字橋與江灣路進犯，同時寶山路天通庵路亦發生接觸，下午五時許，日軍以燒夷彈向我轟擊。五時半，我軍於敵密集砲火下，奮勇衝鋒，遂佔領八字橋。

（八月十四日）晨二時卅分，我軍自八字橋青雲橋一帶反守爲攻，向天通庵日兵營及瀬尾造酒廠進逼。晨九時許，日陸戰隊司令部通知租界，如有損害租界之事，不負責任。十時許日軍水上飛機三架，自浦江界起向虹口方面飛去，我空軍奉令初次開出正式迎戰，以飛機五架，盤旋浦江轟炸敵艦。下午四時三刻，我機兩架，尾部受敵彈擊傷，炸彈架損壞，致有兩彈誤落於大世界前，死傷四百餘人。

（八月十五日）晨，我軍進逼北四川路底日本海軍俱樂部，敵軍三百餘人，完全殲滅。敵軍旋於午後一時十分在日本海軍俱樂部以南地帶反攻，均被我軍擊退。

（八月十六日）楊樹浦一帶發生猛烈砲戰。我飛機傷敵司令艦「出雲號」。浦東方面，受敵轟擊。

（八月十七日）我軍佔領虹橋以南落家宅附近之敵海軍操場。晨午各有敵空軍來襲，我空軍奮勇出動，擊落敵機三架。敵旗艦出雲號，被我某項爆炸器轟炸。

（八月十八日）今日虹口方面東路我軍克復中新兩廠，敵紛向租界潰退。浦東高橋，唐家灣江面敵軍艦陸戰隊，企圖登陸，均經我擊退。駐滬英總領建議劃上海爲「中立區」。

（八月十九日）我軍于晚十時佔領匯山碼頭區域。吳淞口外，我空軍擊中敵航空母艦。晨六時起，我空軍轟炸滙日軍根據地。

（八月二十日）我空軍轟炸敵司令部命中起火，敵機轟南市被擊落二架。虹口一帶大火。我軍前鋒下午四時抵達虹橋。

（八月二十一日）閘北我軍進抵北四川路。兆豐路亦被我軍佔領。敵進攻川沙白龍港及吳淞企圖登陸，均擊退。吳淞晨七時許發生激烈空

図 18

『抗戦半月刊』の付録「淞滬抗戦一月記」（淞滬抗戦一カ月記）はキャセイホテルへの誤爆について言及していないものの、「爆弾ラックが損傷した」という表現から、その言っていることは『西京日報』（考察十二)、『上海抗戦全史』（考察十三）の記述している事件と全く同じ事件であるため、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党の空軍であることが明らかである。

考察十二　『西京日報』の報導

1937 年 8 月 15 日、国民党中央宣伝部発行の『西京日報』が第 2 面に記事を掲載し、「フランス租界に我が飛行機が爆弾を数発落とした」と報じ、更に中央社のニュースを引用し、「14 日、上海のフランス租界に我々の 2 機の飛行機が落とした爆弾により多数の無辜の市民が死傷したことに関して、軍事当局のスポークスマンは、これは非常に

不幸な出来事であり、中国当局と外国人居住者は非常に心配しており、残念に思っている。調査結果によると、上記2機の飛行機は日本の軍艦やその他の軍事目標に向けて行動していた際、日本の高射砲に撃たれ、操縦士が負傷し、爆弾ラックが損傷したため、攻撃対象ではない場所に誤って爆弾が落下した」、と述べている。図19参照。

滬日軍利用租界
攻擊我軍
俞市長照會外領迅予制止
法租界我機遺落炸彈數枚
我盼租界勿爲敵作根據地

図19

『西京日報』の報道は、キャセイホテルへの誤爆に触れていないものの、「爆弾ラック損傷」という表現から、報道の事件は『抗戦半月刊』（考察十一）、『上海抗戦全史』（考察十三）の言っている事件と全く同じ事件であることが分かる。このため、「8・14爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党の空軍であることが明らかである。

考察十三　『上海抗戦全史』の記述

憾廬『上海抗戦全史』第一編（宇宙風社、1937年10月）45頁目に「誤落炸弾」（爆弾が誤って落下した）の項目があり、次の記述が見られる。「本日（1937年8月14日。注記筆者）午後4時45分、空戦が一番激しい時、我が国の飛行機2機が日本軍の高射砲に撃たれて、操縦士が負傷し、爆弾ラックが破損したため、2発の爆弾が自動的に大世界前の広場に落下し、通行人400余人が死傷した。誠に遺憾である。……また、南京路のパレスホテルにも1発の爆弾が落ち、中国

人や外国人観光客及び通行人 200 余人が死傷した。」更に、「我が軍事当局の談話」の項目があり、次の記述が見られる。「南京電：我が国の飛行機二機が 14 日、上海の公共租界とフランス租界に数発の爆弾を落とし、多数の無辜の市民が死傷したことに関して、軍事当局のスポークスマンは、これは非常に不幸な出来事であり、中国当局と外国人居住者は非常に心配しており、残念に思っている。調査結果によると、上記 2 機の飛行機は日本の軍艦及びその他の軍事目標に向けて行動していた際、日本の高射砲に撃たれ、操縦士が負傷し、爆弾ラックが損傷したため、攻撃対象ではない場所に誤って爆弾が落下した、との談話を発表した。」図 20 参照。

安降於某機場。又十六日報載，該後坐駕駛員爲空軍中尉梁鴻雲，亦負重傷，送入同德醫院救治後，終以出血過多，至晚間九時五十分不治而死。

誤落炸彈

自戰事發動後，愛多亞路大世界即移作難民收容所，內住難民四五千人。本日下午四時三刻，空戰最劇烈之際，我國兩飛機因被日方高射砲射中，致駕駛員受傷，炸彈架損壞，因之炸彈兩枚，自動遺落於大世界前廣場內。時路人四百餘，不幸傷亡，誠爲遺憾。慘劇發生後，救護車及救火車立時出動施救，並斷絕交通，將死屍移去。又南京路口匯中飯店亦落下炸彈一枚，死傷中西旅客及路人二百餘名。

我軍事當局談話

南京電：關於我國兩飛機十四日在上海公共租界及法租界遺落炸彈數枚，致多數無辜民衆死傷一節，據軍事當局發言人談：此誠極不幸之事，中國當局及外僑均極關切，而引爲遺憾。據調査結果，上述之兩機，當向日艦及其他軍事目的物動作時，被日方高射砲射中，致駕駛員受傷，炸彈架損壞，因之炸彈自動遺落於並非爲攻擊目標之地點。此爲不可避免之意外，不但駕駛員本身毫無落彈之意，且與其本願相違。該發言人繼謂：無辜民衆之遭受如此意外損害，誠屬遺憾。而死傷者多數爲中國人民，且有少數素爲中國友人之外僑，尤堪惋惜。該發言人末稱：現已對作戰部隊重

図 20

『上海抗戦全史』の上記二つの記述から分かるように、国民党の軍事當局が「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党空軍であることをはっきり認めたのである。

考察十四　『蔡元培日記（下)』の記述

当時中華民国国立中央研究院院長の蔡元培が 1937 年 8 月 15 日の日記の中で次のように書いている。「昨日午後 4 時 35 分、愛多亜路大世界門前に、100 ポンドを超える巨型爆弾二発が飛行機から落下し、約 400 人が死傷した。更に、2 発の爆弾が誤って南京路パレスホテルとキャセイホテルに落ち、多くの人々が死傷した。南京中央社電：我が国の飛行機二機が 14 日、上海公共租界とフランス租界に数発の爆弾を落とし、多数の市民が死傷した件について、軍事当局スポークスマンが、調査の結果、上記二機の飛行機が日本の軍艦及びその他軍事目標に向けて行動していた際、日本の高射砲に撃たれ、操縦士が負傷し、炸弾ラックが損傷したため、攻撃対象ではない場所に誤って爆弾が落下したとの談話を発表した。」（王世儒編『蔡元培日記（下)』、北京大學出版社、2010 年 9 月、ISBN 978-7-301-15840-1、498 頁目)。図 21 参照。

昨下午四时三十五分，爱多亚路大世界门前，由飞机上落下一百余磅之巨型炸弹两枚，死伤约四百余人。又有二弹误落于南京路汇中饭店及华懋饭店，死伤多人。南京中央社电：关于我国两飞机十四日在上海公共租界及法租界遗落了炸弹数枚，致多数民众死伤一节，据军事当局之发言人谈：据调查结果，上述两机，当向日舰及其他军事目的物动作时，被日方高射炮射中，致驾驶员受伤，炸弹架损坏，因之炸弹自动遗落于并非为攻击目标之地点云云。

図 21

蔡元培 1937 年 8 月 15 日日記の内容は『上海抗戦全史』(考察十三）の記述内容と完全に一致しているため、「8・14 轟炸」の張本人は日本軍ではなく、国民党空軍であることが明らかである。

考察十五　『中日空軍血戦記』の記述

中国出版公司編『中日空軍血戦記』(中国出版公司、1937 年 11 月）17 頁目に次の記述が見られる。「本日（1937 年 8 月 14 日。注記筆者）の空戦の結果、各大通りで多くの人々が流れ弾に巻き込まれて死傷した。最も不幸なことに、大世界の繁華街で 200 ポンドの爆弾が落ち、1000 余人が死傷した。後に調査したところ、我が飛行機が引き

返していた際、敵艦の高射砲に撃たれ、爆弾扉が損傷したため、爆弾が落下して、この悲劇が引き起こされた、とのことである。」図 22 参照。

又可以看到敵機的行動；由此，使我對它們更深的認識，而更加的渺視！
當我擱筆前，該感謝這隻負傷的手，歷七八小時爲我記錄這段囘憶，使留下我生活中最寶貴的一頁。再是，那縷縷的花香，由它減除我病境中無限的寂寥。
這一幕强烈戰鬥，由當時身預其事的鬥士追敍出來，可想見我空軍將士英勇却敵的精神。關於轟炸出雲艦未能命中的原因，除威力關係及該艦係主要旗艦故高射砲設置特多防禦特別周密外，厥爲該艦停泊外白渡橋邊，和各外僑商業機關密接，而英美法等國兵艦，亦相距不遠，我空軍將士，爲顧及其他外僑外艦的安全，投彈時不得不稍有顧忌，所以第一天該艦還沒有受多大損失，然而已經飽受虛驚。
本日空戰的結果，各馬路上遭流彈波及死傷的很多，而最不幸的是大世界鬧市中誤墮一二百磅重量的炸彈，當場死傷達一千餘人，事後查係我機飛囘時遭敵艦高射炮擊中，適將炸彈門擊壞，遂致彈向下落，釀成這幕慘劇，不過這是出於非人力所能及的意外，犧牲雖大、也是抗敵禦侮過程中所必不能免的事情。此外空軍少尉任雲閣梁鴻雲的

図 22

『中日空軍血戦記』はキャセイホテルの誤爆に言及していないものの、大世界繁華街の誤爆に触れている。これは North-China Daily News の報道（考察一）、台湾国史館公文書に見られる張治中の電報（考察三）、『上海時代（下）』（考察九）、『抗戦半月刊』（考察十一）、『上海抗戦全史』（考察十三）、『蔡元培日記（下）』（考察十四）に記述されている事件と全く同じ事件である。故に、「8・14 爆撃」の張本人は日本軍ではなく、国民党の空軍であることが明らかである。

結論：

上記考察の通り、図1「南京路外灘の惨状」の写真は、上海の南京路外灘に位置するキャセイホテルが1937年8月14日、国民党空軍により爆撃された惨状を表している写真である。しかし、「中国抗日戦争図誌（中巻）」や「旧中国大博覧（下）」などは、真実を歪曲し、それを日本軍の暴行とでっち上げ、責任を日本軍に転嫁し、日本軍に濡れ衣を着せようとしている。日本を貶めるために使用されるその種の手法は、史実の歪曲や捏造、虚偽の妄言といった、あらゆる手段を駆使している。こうした反日プロパガンダは、真実を無視し、反日感情を煽り立て、歴史を曲解することで、日本への不当な偏見を広めようとする策略に過ぎない。

附記　図 4 の写真に関する説明

中国中央政府の重要なニュースメディアの 1 つである日本語版「中国網」サイトは 2014 年 9 月 23 日、「中国侵略日本軍が封印した写真が公開」と題する記事を発表し、12 枚の写真を紹介した。その 1 枚目の写真は図 4 の写真と全く同じものである。図 A 参照（http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2014-09/23/content_33588324.htm）。

ホーム>中日両国

japanese.china.org.cn | 23. 09. 2014

中国侵略日本軍が封印した写真が公開

タグ：日軍中国侵略日本軍　不許可

1937年から1945年にかけて、日本の毎日新聞の従軍記者は大量の日本軍による中国侵略の写真を撮った。世論を抑えるため、日本軍は報道審査制度を強化し、陸軍省、海軍省、情報局は極めて厳しい基準で報道写真を審査した。軍事情報などの機密情報に関わるものだけでなく、日本軍による中国侵略や家を焼き人を殺し財産の略奪がわかるもの、日本軍のイメージを傷つけると思われるもの、兵士の厭戦気分を掻き立てる写真にはすべて「不許可」の印が押され、厳しく公表が禁じられた。

日本軍の敗戦後、軍は戦場で撮影した写真を全て焼き払うことを命じた。しかし、大阪に本社を置く毎日新聞は軍の脅しに屈せず、写真とフィルムをこっそり地下室に移した。その後の台風で一部の資料は水没したが、残っているものもある。毎日新聞は1977年と1998年にこれらをまとめた写真集を出版し、苦難を乗り越えたこれらの貴重な史料が再び公になった。これらは歴史が残した日本軍による暴行の動かぬ証拠でもある。

図 A

「中国侵略日本軍が封印した写真が公開」の記事は次の通りである。「1937 年から 1945 年にかけて、日本の毎日新聞の従軍記者は大量の日本軍による中国侵略の写真を撮った。世論を抑えるため、日本軍は報道審査制度を強化し、陸軍省、海軍省、情報局は極めて厳しい基準で報道写真を審査した。軍事情報などの機密情報に関わるものだけでなく、日本軍による中国侵略や家を焼き人を殺し財産の略奪がわかるもの、日本軍のイメージを傷つけると思われるもの、兵士の厭戦気分を掻き立てる写真にはすべて「不許可」の印が押され、厳し

く公表が禁じられた。

日本軍の敗戦後、軍は戦場で撮影した写真を全て焼き払うことを命じた。しかし、大阪に本社を置く毎日新聞は軍の脅しに屈せず、写真とフィルムをこっそり地下室に移した。その後の台風で一部の資料は水没したが、残っているものもある。毎日新聞は 1977 年と 1998 年にこれらをまとめた写真集を出版し、苦難を乗り越えたこれらの貴重な史料が再び公になった。これらは歴史が残した日本軍による暴行の動かぬ証拠でもある。」

筆者は毎日新聞社編「不許可写真 (1)」(毎日新聞社、1998 年 12 月 30 日発行、ISBN 4-620-79112-1) の 7 頁目に図 A の写真を見つけた。図 B 赤枠の写真を参照のこと。
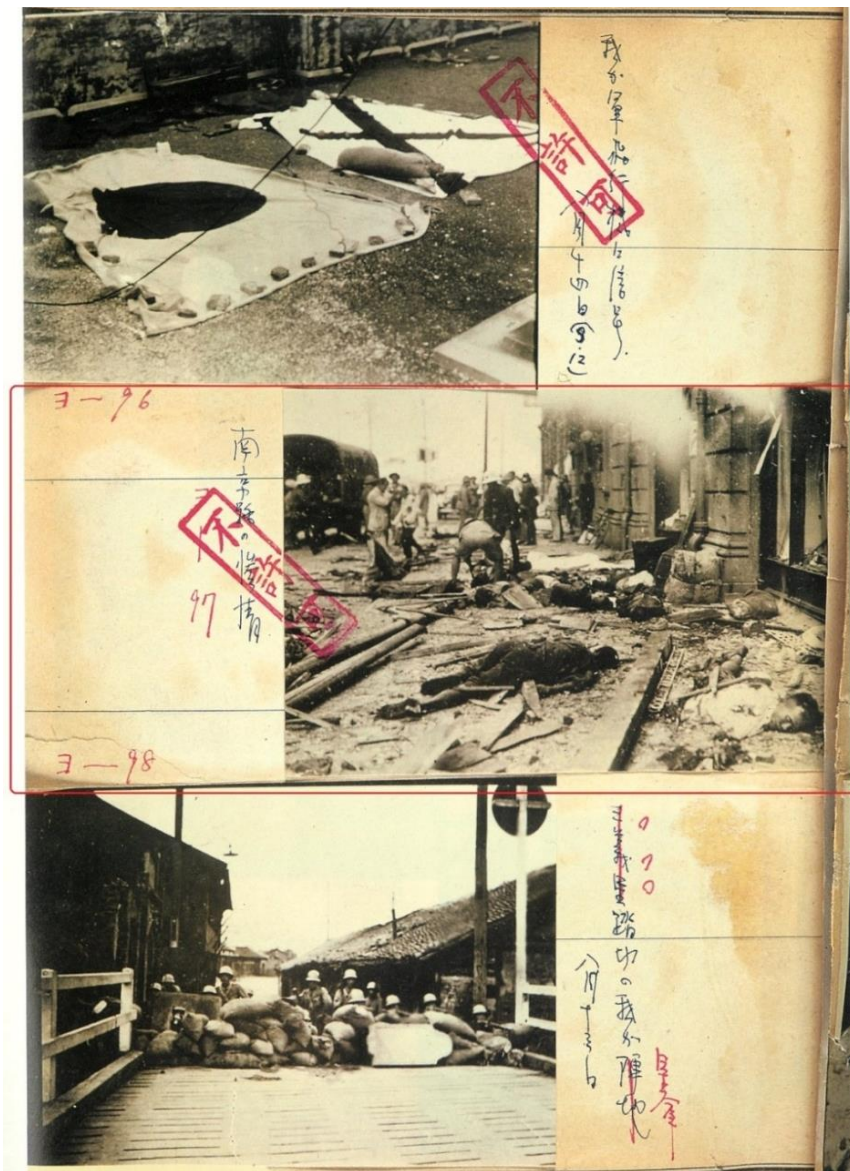
図 B

図 B の原写真の左側にカメラマンが直筆で書いた説明文「南京路の惨情」がそのまま見受けられる。

「不許可写真（1)」の 213 頁目に図 B の写真が再び登場し、次のように解説されている。「不許可となった南京路の惨状。第 2 次上海事変の始まった翌日の 8 月 14 日、中国空軍は上海停泊中の「出雲」などを爆撃した。フランス租界・南京路キャセイホテル前に落ち 2000 余人の死傷者を出した。日本人新聞記者撮影の写真は発表を禁止された。外国人記者撮影のものは世界に送られた…上海 1937 年」。図 C 参照。

図 C

「不許可写真（1)」の上記解説から、二つの事実が分かる。一．図 4 の写真は日本の従軍記者が撮影したものである。二、1937 年 8 月 14 日、上海南京路キャセイホテル等を爆撃したのは日本軍ではなく、国民党空軍である。

しかしながら、「侵華日軍南京大屠殺日誌」は、歴史の事実を改ざんし、大嘘をでっち上げ、国民党空軍によるキャセイホテルへの爆撃を故意に「日本の飛行機の爆撃」と巧妙にすり替えるなど、世界を欺こうとする明確な意図が窺える。これは、中国の反日プロパンガンダとメディアの非常に悪質かつ卑劣な常套手段であることは疑いない。

注 1

The China Weekly Review の主筆兼発行者のジョン・B・パウエル（John B. Powell）著『MY TWENTY-FIVE YEARS IN CHINA』の記述によると、米国前大統領セオドア・ルーズベルトの息子の妻であるセオドア・ルーズベルト・ジュニア夫人が当時、上海訪問中。『MY TWENTY-FIVE YEARS IN CHINA』303 頁目を参照下さい。また、304 頁目に、蔣介石夫人宋美齢がセオドア・ルーズベルト・ジュニア夫人電報への返電の記述も見られる。

ウォルター・C・ケント（Walter C. Kent）著「WINGS FOR CHINA 」の記述によると、米国前大統領セオドア・ルーズベルトの息子の妻であるセオドア・ルーズベルト・ジュニア夫人と息子が当時上海訪問中で、キャセイホテルに泊まっていた。セオドア・ルーズベルト・ジュニア夫人は、キャセイホテルが爆撃される五分前に、奇跡的にホテルを出た。1937 年 11 月発行の「The Atlantic Monthly」第 160 巻第 5 號 644 頁目と 645 頁目を参照のこと。